

文化現象を示す 主題図の読み取り方について

法政大学教授 中俣 均

1 文化についての主題図

中学校で用いられる社会科の地図帳に、いわゆる文化的な現象についての主題図が積極的に採用されるようになったのは、1990年代の初めからである。学習指導要領の改訂にともない、生活文化を重視することで、いわゆる「地名物産地理」からの脱却がはかられたためであった。それ以前の地図帳にも、かろうじて世界の言語や宗教の分布図などが1～2葉は見られたものだが、それらは概して味気ない単調な図で、あまり多くのことを語るようなものではなかった。その傾向が大きく変化したのである。

『中学校社会科地図 初訂版』（以下、『初訂版』と略記）には、たとえば「日本の生活・文化」というページがあって、日本各地の特色ある祭りや様々な郷土料理を示した主題図が載せられている。カラフルでにぎやかな地図が増えて、見ているだけでも楽しくなるから、生徒たちの興味をひきつけるにはさぞ効果的であろうと思われる。だが、実際にそうした文化的な現象についての主題図を活用して、生徒に何を、どのように教えたらいいかとなると、ことはそう簡単ではない。

2 地図化にはなじみにくい文化現象

文化的な現象は、一般に地図化にはなじみにくい。その理由はまず、文化なるものがほ

とんど概念上の産物だからである。掘れば出てくる石油資源などと違って、文化そのものが目に見えるわけではない。したがって、現象自体の記号化がなかなか容易ではない*。だから、油田や鉱山の位置を地図上にプロットしたり、単位地域ごとの工業製品の生産量を図化して地図に描き入れたりといったやり方が、文化的な現象については原理的にむずかしいのである。上述の「祭り」や「郷土料理」の図は、実はなかなかの苦心作なのだが、なぜそういったことがらが地図化の対象として選ばれているかといえば、地域ごとに異なる現象を比較する「単位」現象として、それらがいちおうは理解しやすいためである。（厳密に言えば、このことにも問題なしとはしないが…。）また、これと関連するが、文化的な現象を示す主題図は、定量的な表現になじまないため、どうしても定性的なものになってしまうという点も重要である。地図中の記号を見比べて、ここがあそこよりも量が多い、といった読み方が、これも原理的にできないのである。もちろん中学校段階では、生徒はこのようなことまでは知らなくてかまわないだろう。さしあたってはそれよりも、カラフルな地図を見て、祭りでも郷土料理でも、それらが日本各地でさまざまな形になっていることを、つまり各地の文化には多様なものがあるのだということを知ればよいと思う。

前置きがすっかり長くなってしまったが、

本題に入って、文化的な現象を表わした地図の活用法、というよりはそうした地図を見るときに注意すべきことになってしまうが、以下ではおもに宗教に関する主題図を取り上げて、少し考えてみたい。『初訂版』の125ページに、世界の宗教の分布図がある（下図参照）。この図から素朴に読み取れることは何だろうか？

3 世界の宗教分布図

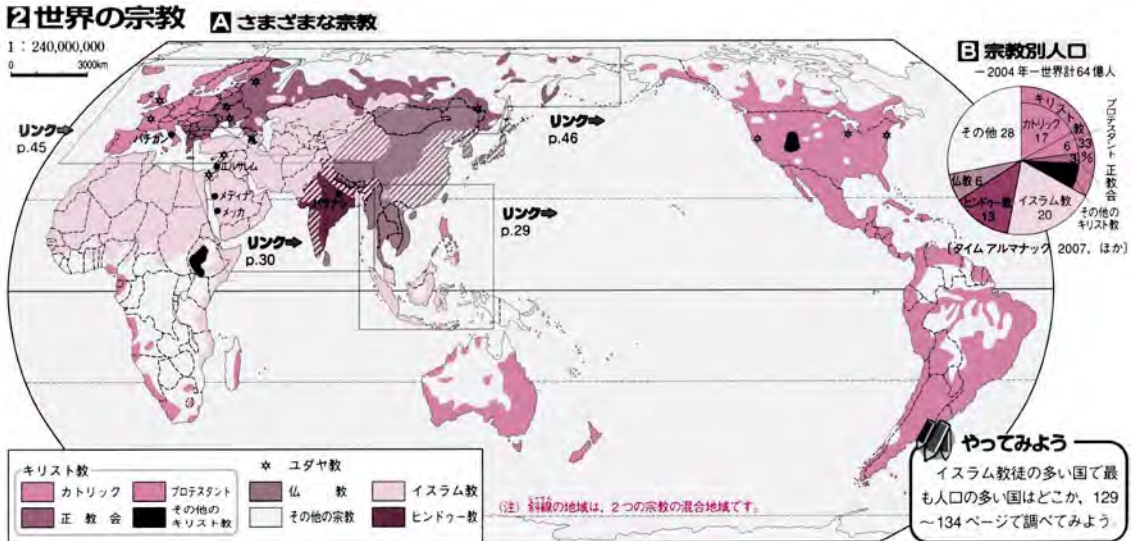
いわゆる世界宗教と呼ばれる信者数の多い各宗教は、この分布図ではわりあい均等に世界に広がっているように見える。しかし、それでも図の右上にある各宗教別人口の円グラフと対照させてみると、分布図中で塗り分けられているそれぞれの色の面積が、必ずしも各宗教人口の多さを表わしてはいないことがわかるだろう。正教会（ロシア正教）などはヒンドゥー教よりもずっと広い面積になっているけれど、宗教人口ではヒンドゥー教のほうが3倍以上である。また、右下にある「やってみよう」にあるような、イスラム教徒の多い国で人口の多いのはどこか、という問いに

は、うっかりすると中東のどこかの国を答える生徒もいよう。

こうした点を正確につかむためには、世界の宗教の分布図だけでは十分ではない。117ページにある世界の人口分布の図と対照させる必要がある。ほんとうは、同じスケールで描かれた宗教分布図と人口分布図とを重ね合わせてみるとよいのだが、あいにく『中学校社会科地図 初訂版』では、両図のスケールが同じになっていないから、それぞれのページのところに指を入れながら交互に何度も両方を比べてみるほかはない。しかし、このような点に注意することで、表面的な理解から一歩踏み出すことができるかもしれない。

いうまでもないが、宗教人口の多少はその宗教自体の価値や意味とは基本的に無関係である。しかし、現在の世界におけるある意味での「勢力」、つまりある種の行動を共にする政治的・文化的な人間集団として、宗教をその人口規模という側面からとらえておくのも大切なことである。

次ページに示した図は、少しデータの時期が古いものだが、ある本の中から見つけた、



「中学校社会科地図 初訂版」p.125

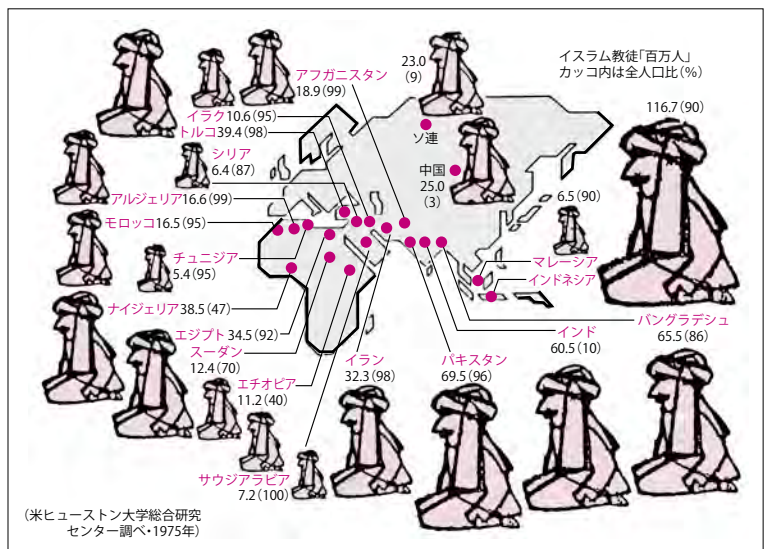
世界のイスラム教徒数を国別に示したものである（朝日新聞外報部（1980）『目で見る現代 世界地図 '80』）。

先にあげた「やってみよう」の問いは、実はこの図が示しているような現実を知ること、つまりイスラム教は（現代では）必ずしも中東だけの宗教ではない、ということを理解するためのものである。そうした理解は、この図を生徒に見せれば一発で成就されよう。

「重ね合わせ」に対していえば「見比べ」ということになろうか。こういったおもしろそうな地図を探しておいて、それを生徒に示して見比べさせるのである。

ちなみに、国別のイスラム教徒数の比較図などは、最新のデータで生徒に「作らせる」こともできるかもしれない。シンボルマーク（この場合は教徒らしき人の姿）をこしらえておいて、それを教徒人口比にしたがって拡大あるいは縮小（面積比に換算すること）したものを、ベースマップにのせてゆくのである。パソコンが利用できればこうした作業はさほどむずかしくはないだろうし、できあがった図を見れば、生徒の興味もいっそう増すものと思われる。イスラム教以外の宗教・宗派について、こういった作業をしてみると、いろいろなことがそこから読み取れるはずである。

では、どうやったらこのような地図が探せるだろうか？ これについての簡便な方法はなかなかない。教師自身がふだんから文化的な現象に関心を持っていれば、おのずからこういうたぐいの図を発見できるはずだ、とい



世界のイスラム教徒

うほかはない。身近な新聞や雑誌などを日々注意して見ていると、意外におもしろい地図が見つかることがある。時事的な話題に、意識して常にアンテナをはりめぐらせていることが大切なのである。

4 大縮尺の地図で

さて、再び世界の宗教の分布図に戻ってみよう。このような小縮尺の世界地図は、大まかな様子をつかめるものの、当然のことながら細部については読み取りができないことがある。『初訂版』には、世界の宗教分布図をより大縮尺で（ということつまり部分的に拡大した形ということになるが）、示した主題図もいくつか収められている。p.29の「東南アジアの宗教」、p.30の「西アジア・南アジアの宗教」、p.45の「ヨーロッパの宗教」、p.46の「ロシア連邦とまわりの国々の宗教」といった各図である。宗教の違いを主因にした国家間あるいは国内諸勢力の対立・紛争は、現代世界の各所に見られる現実的で深刻な問題であるが、これらの図に示されるようなスケールで起こっていることが多い。そうした

対立・紛争の見られる地域を、いまあげたような各図の上にプロットしてみる（これも一種の重ね合わせ法である）と、対立・紛争のようすがよりよく理解できるであろう。p.29の図からは、ヒンドゥー教のインドからイスラム教のパキスタンやバングラデシュが独立した、という平板な理解が必ずしも成り立たないことが、またかつて東欧諸国に含まれていたポーランドやチェコ、スロバキアなどが、発足時のEU諸国と相互に親近感をもち、比較的早期にEU加盟が実現した理由が経済的な事情以外にもあることが、それぞれ推しはかれよう。（『初訂版』p.37の「まとまるヨーロッパ-EU-」の主題図を参照。）

また、こうした比較的大きなスケールの地図でないと、読み取れないこともある。イスラム教徒が大多数を占めるインドネシアにあって、観光地として有名なバリ島だけが非イスラム地域である（いわゆるバリ・ヒンドゥー教）ことなどは、その好例であろう。

5 一神教と多神教

最後にもうひとつ。文化庁が毎年編集している『宗教年鑑』（政府刊行物を取り扱う書店で入手できる）によると、日本の宗教団体・宗教法人は約22万4000あり、各団体の申告信者数を合計すると2億1100万人ほどになる（2006年末のデータ）。実際の総人口の2倍近いこの数字は、生後間もなく「お宮参り」で神社に連れて行かれ、結婚式は森の中の白亜の教会でと夢を描き、死ぬとお寺から僧侶を招いて葬式を…という形で、一生のうちにその時々事情で複数の宗教と「懇意になる」日本人が数多いことのあらわれでもある。このような日本は、世界の宗教分布図では斜線が引かれて、「2つの宗教の混合地域です」

という注がついている。いま述べたような例であれば、本来は「2つ以上の」とすべきであるが、圧倒的に信者数の多いのが神道系や仏教系（それぞれ約9000万人弱）の「2つ」であるという意味なら、この表現もあながち間違いとはいえない。大切なのはむしろ、「混合地域」といういい方のほうで、別々の宗教信者が一定地域に文字通りモザイク状に「混在」しているケースと、日本のように（中国もおおむねそうであるといえる）、ひとりの人間の一生の中に複数の宗教が「混在」しているケースとの両方がありうることを認識していることである。つまり、俗に「多神教」といわれることの意味を、生徒に正しく理解させることが重要なのである。

6 おわりに

振り返ってみると、こうすればこんな効果が…という前向きな話が、あまりできなかったかもしれない。しかし、冒頭に述べたように、文化的な現象の主題図に関しては、実際のところ話はそう簡単ではないのである。

話がそう簡単ではない、ということ教えるのは、はたして生徒たちにその教科への興味を抱かせるのに有利かどうか。地理だけでなく、社会科を教える先生方が、一般に、そして宿命的に、常に頭を悩ませておられる点でもあろう。しかし、そこをなんとか工夫して克服していただきたいと切に願う。簡単ではない、複雑だからこそ、それらを知り、考えることが面白いのだ、ということも…。

*文化現象の記号化をなしとげ、地図化を果たした例外的なものが、言語である。『初訂版』126ページ④にその実例が載っている。また、同ページ⑤の図も、雑煮のもちが角か丸かという側面を記号化して描いている。